

トマス・アクィナスにおける 〈現実態における無限の多〉について

小山田 圭一

序

我々がここに取り上げる無限という概念は、トマス・アクィナスの体系において重要な役割を担っている。というのも、神および被造物を説明する、あるいはそれらを対比的に説明することは、トマス哲学の本分とも言える課題であるが、それらに取り組みにあたって無限の概念は不可欠だからである。神の存在証明、神の無限性、世界の永遠性、比例性の類比、方々で用いられる無限廻行の不可能性に基づく議論など、トマスが無限という概念に依拠しつつ論述を進めている箇所は枚挙に暇がない¹⁾。

しかるに、無限概念についてのトマスの論述は多くの問題を抱えており、これまで様々に批判的あるいは擁護的な研究がなされてきたが²⁾、既存の研究において問題が意識されてはいるものの未だ解決されていない無限に関する問題がある。それについては次節で詳述するが、一言で

1) トマスの著作について、『命題集註解』はマンドネ版を、『能力論』、『任意討論集』および『形而上学註解』はマリエッティ版を、それ以外は主にレオ版を参照した。また著作の略号については慣例に倣う。

2) 無限廻行に関する問題については多数の著作があり、とくに神の存在証明に関するものだけでも相当な数に上るだろう。ここでは、本論文で扱う「無限の多」の問題に関連するもののみを挙げておく。Cf. Leftow, B., 'Aquinas on the Infinite', *Proceedings of the Twentieth World Congress of Philosophy*, Vol. 2, pp. 27-38, 1999; Drozdek, A., 'Number and Infinity: Thomas and Cantor', *International Philosophical Quarterly*, Vol. 39, pp. 35-46, 1999; Cartwright, R., 'Aquinas on Infinite Multitudes', *Medieval Philosophy and Theology*, Vol. 6, pp. 183-202, 1997; Kelly, C. J., 'Circularity and Contradiction in Aquinas' Rejection of Actually Infinite Multitudes', *The Modern Schoolman*, Vol. 61, pp. 73-100, 1984; LaMountain, G. F. J., 'The Concept of the Infinite in the Philosophy of St. Thomas Aquinas', *The Thomist*, Vol. 19, pp. 312-338, 1956.

言えば、それは、神の全能性と、現実態における無限の多 *multitudo* とに関する問題である³⁾。

それゆえ、本論文では、この問題の所在を明らかにしつつ、その解決のためにさらにいかなることが問題となるのか、またいかなる解釈が可能なのかを探りたい⁴⁾。

1. 問題

1.1 「神の全能性」という概念は、往々にして逆理の危険に晒されてきた⁵⁾。そのため、神に全能性を帰すような有神論的学説においては、逆理に陥ることのないよう細心の注意を払って全能性を規定することが肝要である。トマスによる神の全能性の議論において、逆理を避けるための工夫と見なせるのは、「絶対的に可能なこと *possibile absolute*」という概念に依拠して全能性を定義していることである。つまりトマスによれば、全能性とは、絶対的に可能なすべてのことを実現し得ることである⁶⁾。

そして「絶対的に可能なこと」というのは、次のように定義される。すなわち、絶対的に可能なこととは、主語と述語とが矛盾しない命題によって表示されるところのことがらである。例えば、「ソクラテスが座

3) 既存の研究の中に、本論文で取り組まれるこの問題について、その解決を図ったり、詳しい検討を加えようとしたりする研究は、管見の及ぶ限りでは見当たらなかったが、次の三つの文献では、わずかな捉え方の違いを除けばほぼ同様の問題への言及がある：Cartwright, R., *op. cit.*, pp. 200-201; Wippel, J. F., 'Thomas Aquinas on the Possibility of Eternal Creation', in *Metaphysical Themes in Thomas Aquinas*, CUA Press, 1984, p. 212 footnote 65; LaMountain, G. F. J., *op. cit.*, pp. 320-321。なお、これらの文献で当の問題がどう扱われているかについては、脚注 16) を参照のこと。

4) 以下の議論で主な考察の対象となるトマスの著作箇所は、『神学大全』q. 7, a. 4, 同書 q. 25, a. 3, 『真理論』q. 2, a. 10, 『任意討論 IX』q. 1, a. 1, 『任意討論 XII』q. 2, a. 2, 『自然学註解』III, lec. 8, 『世界の永遠性について』である。

5) 例えば、Martin, M. and Monnier, R. (eds.), *The Impossibility of God*, Prometheus Books, 2003; Martin, M. (ed.), *The Cambridge Companion to Atheism*, Cambridge University Press, 2007 の全能性に関する箇所を参照のこと。また、トマスにおける全能性の困難については、例えば、Geach, P., 'Omnipotence', *Philosophy*, Vol. 48, pp. 7-20, 1973; Brock, S. L., 'The *ratio omnipotentiae* in Aquinas', *Acta Philosophica*, Vol. 2, pp. 17-42, 1993 を参照されたい。

6) *ST I*, q. 25, a. 3, c.: "Relinquitur igitur quod Deus dicatur omnipotens, quia potest omnia possibilia absolute".

る」は、主語と述語とが矛盾しないため、絶対的に可能であるが、「人間は驢馬である」は、主語と述語とが矛盾しているため（理性的と非理性的が背馳）、絶対的に可能ではないということになる⁷⁾。以上に基づいて、神が全能であることを言い換えるならば、次のようになる。すなわち、神が全能であるとは、神が矛盾しないことがらのすべてを実現し得るということである。

以上のような「全能」についての説明は、神学的あるいは哲学的学説を逆理から遠ざける、周到な説明だと思われる。「絶対的に可能なこと」についての説明も、少なくとも論理的・形式的には明快である。しかし、この「絶対的に可能なこと」に基づく全能の定義は、神の能力をどのようなものとして捉えているのか、あるいはまた、神の能力の対象として具体的にどのような領域を画定しているのか。こうしたことを整合的に理解するには少なからず困難が伴う。例えば、次のような問題が考えられるからである。『神学大全』I, q. 117, a. 2においてトマスは、人間は神について天使に教えることができないと主張している。しかるに「人間が神について天使に教える」は一見したところ矛盾を含むようには思えない。それでは、神が「人間が神について天使に教える」を実現することはできるのか。それとも「人間が神について天使に教える」は矛盾を含んでおり、そのために神はそれを実現できないのか。今、この問題を直接扱うことはしないが、これと類似のことは神の全能に関して一般的に問題となるのであり⁸⁾、我々の主題である無限についても同様の問

7) *ST* I, q. 25, a. 3, c.: "Dicitur autem aliquid possibile vel impossibile absolute, ex habitudine terminorum: possibile quidem, quia praedicatum non repugnat subiecto, ut Socratem sedere; impossibile vero absolute, quia praedicatum repugnat subiecto, ut hominem esse asinum."

8) 以上のような問題を一般化しておくことは、神の全能について何が問題なのかを明確にするという点で有益である。今、我々が問題にしていることがらの形式を一般化して取り出せば、次のようになる。

- ① トマスの著作において、「 a が不可能である」と主張されている。
- ② a それ自体に矛盾が含まれていないように見える。
- ③ トマスの体系において、神が a を実現することはできるのか。

注意すべきは、こうした形式が当て嵌まることらについて、体系上の困難と見做される問題が生じる場合に二通りがあるということである。一つは、ここで言われる a に矛盾が含まれていないことが明確な場合である。というのも、その場合、 a が矛盾を含まないことから、それは絶対的に可能なものだというになり、神によって実現可能であるかに思われるが、

題が生じる。次にそれを明らかにしよう。

1.2 『神学大全』 I, q. 7, a. 4 では、現実態において無限な多があり得るかが問われている。そこでは、何らかのもののために無限の多が必ず要求される場合に言われる自体的に *per se* 無限な多と、それとは異なり、何らかのもののために無限の多が必ずしも要求されない場合に言われる付帯的に *per accidens* 無限な多が区別され、双方が現実態においては不可能であると主張されている。そこではまた、可能態における無限の多ならばあり得るという主張がなされている。可能態における無限とは、例えば、連続体を分割すればするほど多くの部分が生じ、それに限りがないような場合に見出され、また同様に、多を足していくという場合にも見出されるようなものである⁹⁾。そして、この箇所ですべてのことが主張されていることは明白である。すなわち、現実態において無限な多があることは不可能であるということである¹⁰⁾。

それでは、無限な多が現実態においてあるということがらは矛盾を含んでいるだろうか。これについては、矛盾することを主張するように思える箇所(I)がある一方で、矛盾しないことを主張するように思える箇所(II)もある。

(I) それゆえ、無限であることは、現実態においてあるということに背馳するのであるから、(中略) 現実態において無限であるものは存在しない¹¹⁾。

にもかかわらず不可能性が主張されていることになるからである。もう一つは、*a* に矛盾が含まれているか否かがはっきりしない場合である。その場合は、*a* が絶対的に可能なものであるか否かも不明であり、それゆえ神がそれを実現可能か否かも定まらない。にもかかわらず、不可能性が主張されているために問題が生じるのである。そして、*a* に矛盾が含まれていることの明確な論証が既になされている場合、上の形式を *a* に適用して問題化することはできない。その場合、*a* を実現することが神にも不可能であることが帰結するだけである。

9) 『真理論』 q. 2, a. 10, c. では、「可能態における無限と言われるのは、常に継起において成立するものである *dicitur infinitum potentia quod semper in successione consistit*」と規定されている。

10) したがって、脚注 8) で見た問題形式の①は満たされることになる。

11) *Quodl* IX, q. 1, a. 1, ad s.c. 1: “Unde, cum esse infinitum repugnet ei quod est esse actu, (中略) non est infinitum in actu”.

(II) そのこと（現実態における何らかの無限）が神の絶対的な能力に背馳することはない。というのも、それ（現実態における何らかの無限）は矛盾を含意しないからである¹²⁾。

(I) で言われる「現実態において無限であるもの」や(II)で言われる「現実態における何らかの無限」の周延には、現実態における無限の多も含まれていることに注意されたい。(I)を含む議論においては多についての言及が見られるし¹³⁾、(II)を含む議論においては無限について特段の限定はなされていないからである。

いずれにせよ、以上のことから言えるのは、現実態における無限の多ということに矛盾が含まれるか否かは必ずしも明確ではないということである¹⁴⁾。このことにしたがうならば、神の全能性の規定からして、神が現実態における無限の多を実現できるかどうかにも明確にはならない、と言いたいところである。ところがなお理解しがたいことに、(I)と(II)が言われているのは、神は現実態における無限を作り得ないということを主張する議論においてである。ここに混乱があるとすれば、我々の理解に起因するのだとみることもできるかもしれない。しかし、トマス自身が確かな考えを持っていないことを窺わせる事実を、我々は少なくとも三つ挙げることができる。

まず第一に、『世界の永遠性について』の末尾、世界が常にあったことの不可能性を、魂が無限にあることの不可能性によって示そうとするある人々に対する反論の中で次のように言われている。

そしてさらに、現実態において無限なものが存在することを神が実現し得ないということは、未だ論証されてはいない¹⁵⁾。

したがって、『世界の永遠性について』以前の著作であるとされる『神

12) *Quodl* XII, q. 2, a. 2, c.: "non repugnat potentiae Dei absolutae, quia non implicat contradictionem."

13) 『任意討論 IX』 q. 1, a. 1 の主文および第 1 異論解答を参照のこと。

14) これにより、我々の無限の問題に脚注 8) で述べた問題形式が適合することが判る。

15) *DAM*: "Et preterea non est adhuc demonstratum quod Deus non possit facere ut sint infinita actu."

学大全』、『真理論』、『任意討論 IX』での同様の議論は、トマス自身も決定的なものではないと自覚しているとみてよいだろう¹⁶⁾。また残る二つは状況証拠的なものであるが、第二に、『真理論』q. 2, a. 10では、「神は無限を作ることができるか」という問いについて肯定の側にも否定の側にもつかず、トマス自身の主張を述べずに議論を終えている。そして第三に、(I)を含む『任意討論 IX』q. 1, a. 1では、通常とは逆に、トマスの主張が反対異論の側とではなく異論の側と合致するものとなっている。

さて、以上のことから二つの課題を見出せる。第一の課題は、『神学大全』、『任意討論 IX』、『任意討論 XII』などで一方の側（否定する側）を主張しているにも関わらず、現実態において無限なものを神が実現し得ないということの論証が未だにないとトマスが述べる要因がどこにあるのかを探ることである。また第二の課題は、トマスの体系の整合性を考慮しようとした場合、現実態において無限な多を神は実現できるかという問いに対して、どのように答えることが望ましいのかを模索することである。

2. 問題の分析

ここでは第一の課題について検討したい。『神学大全』I, q. 7, a. 4の本文では、現実態における無限の多が不可能であることを言うために、二つの論拠を示している。以下では、これらの論拠における諸前提の妥当性について考えることで、「現実態において無限なものを神が実現し得

16) 著作年代については、Torrell, J.-P., O. P., *Saint Thomas Aquinas* Vol. 1, revised edition, Robert Royal (trans.), CUA Press, 2005 に依拠した。なお、脚注 3) に挙げた三つの文献では、この『世界の永遠性について』からの引用箇所と『神学大全』I, q. 7, a. 4 などでの立場との一見したところの不整合が問題とされている。Wippel 論文は、トマスの立場の時代的変遷として単純に片付けている (*op. cit.*, p. 212, footnote 66)。また、LaMountain 論文は、とくに何の議論も無く『神学大全』の立場が勝るとして『世界の永遠性について』における言明を退けている (*op. cit.*, pp. 320-321)。そして、Cartwright 論文は、作出因の因果系列に関する無限の問題を主に扱う論文の最後に当の問題を提起し、それ以上の考察を加えてはいない (*op. cit.*, pp. 200-201)。一方、本論文では、時代的変遷と見たり、一方の言明を退けたりすることはせずに、トマスの体系に内在的な視点からこの問題のある意味での解決を図る。なお、これらの論文の主眼はそれぞれ本論文とは別のところにあるが、それらにおける無限に関する議論からは本論文も多くを負っている。とくに、Cartwright 論文第五節 (pp. 195-199) からは、数と超越的な多との区別に関して学んだ点が多い。

ないということの論証が未だにない」とトマスが述べるに至る要因がどこにあるかを可能なかぎり追究する (2.1, 2.2)。また、『神学大全』I, q. 7, a. 4 と類似の議論が見出される『任意討論 IX』q. 1, a. 1 および『任意討論 XII』q. 2, a. 2 についても検討を加える (2.3)。

2.1 まず一つ目の論拠は次である。

すべての多は、多の何らかの種においてあり、また、多の種は数の種に即してある。しかるに、いかなる数の種も無限ではない。どんな数も一によって測られる多であるからである。それゆえ、現実態における無限の多は、自体的にも付带的にも不可能である¹⁷⁾。

今、この論拠における前提は三つはある。すなわち、1)すべての多が何らかの種においてあること、2)多の種は数の種に即してあること、3)一によって測られる多としての数の種は、無限でないこと、の三つである。したがって、もしこの箇所が論証と見做されないとしたら、これらのいずれかに問題があることになる。

まず、1)の前提であるが、その妥当性は自明なものとしてよいだろう。これは種 *species* についての論理的前提と見做せるからである¹⁸⁾。

次に、2)を飛ばして3)の前提を考える。この前提は、数の理拠 *ratio* に、「一によって測られる」ということが属するかぎりでは認めざるを得ないものである。つまり、いかなる数についても、それが一によって測られてしまっただけでは無限とは言えず、また無限であれば一によって測られ

17) *ST I*, q. 7, a. 4, c.: “omnem multitudinem oportet esse in aliqua specie multitudinis. Species autem multitudinis sunt secundum species numerorum. Nulla autem species numeri est infinita: quia quilibet numerus est multitudo mensurata per unum. Unde impossibile est esse multitudinem infinitam actu, sive per se, sive per accidens.”

18) トマスはここで次の論理的原理に依拠していると思われる: “nihil est in genere quod non sit in aliqua eius specie” (*SCG I*, cap. 25; *IV*, cap. 33; *Quod I IX*, q. 1, a. 1, c.; *ST I*, q. 15, a. 3, ad 4)。今の場合、多が類であるかが問題であるが、ここでの多は「一によって測られる」という規定が当て嵌まる多であるので、それは量に属する類である (*QDPD*, q. 9, a. 7, c.; *ST I*, q. 30, a. 3, c.)。したがって上の原理の ‘genus’ に ‘multitudo’ を代入すれば、前提 1) がしたがうのである。なお以下での議論において、ここでの多とは異なる、いかなる類にも属さない多 (*ST I*, q. 30, a. 3, c.) は考察の鍵となる。

ことはできないため、いかなる数の種も無限であることはできないのである。

最後に、2)の前提（多の種は数の種に即してある）について考えよう。先に言ってしまうえば、この前提の妥当性には（少なくとも必然性には）疑問の余地がある。それを確かめるのに、数と多を明確に区別する次の箇所が決定的だと思われる。トマスは『自然学註解』III, lec. 8において、アリストテレスによる無限の多の不可能性についての議論を、今扱っている一つの論拠に類似した論拠として整理した後¹⁹⁾、そうした論拠の蓋然性を主張する議論の中で次のように述べている。

数とは、『形而上学』10巻で言われているように、一によって測られる多であるゆえ、それは多の上に測定の理拠を付加するのであり、このことのゆえに、数は離散的な量の種として定められる一方、多はそうではなく、むしろ超越的なものどもに属するからである²⁰⁾。

ここでの後半はまさに、数と多がどのように区別されるかを述べており、この区別を認めるかぎり、前提2)を無条件に肯定することはできない筈である。なお、数が一によって測られる多であるという二つの引用箇所に見出される共通の規定と前提2)における主述の関係からして、『神学大全』からの箇所では、数と多にある種の一致が認められることになるが、一方の『自然学註解』からの箇所では、数が、より一般的な多（超越的な多）に包含されるものとして規定されているということに注意されたい。

以上から、第一の論拠に関して、それが論証とならない要因がどこにあるのかの可能性は一つに限定されると思われる。すなわち、それは、

19) 『神学大全』における一つの論拠と『自然学註解』におけるトマスによって整理された論拠の違いは、前者で 'multitudo' と言われている部分が後者では 'numerabile' となっていること以外に際立ったものは見られない。そしてこの措置は、『自然学註解』のこの箇所、数と超越的な多の区別を導入する話の都合上のことと考えられる。

20) *In Phys* III, lec. 8: "Addit enim numerus super multitudinem rationem mensurationis: est enim numerus multitudo mensurata per unum, ut dicitur in X *Metaphys*. Et propter hoc numerus ponitur species quantitatis discretæ, non autem multitudo; sed est de transcendentibus."

多の種は数の種に即してあるという二つ目の前提である。そして、『自然学註解』における数と多の区別を踏まえると、数としての無限と多としての無限との区別が予想され、またそうすると上述の第一の論拠では、数としての無限が現実態においてあることの不可能性しか示されていないことが予想される。これらについては、第3節で考察することにした。

2.2 次に二つ目の論拠の検討に移りたい。

諸事物の本性において存する多は創造されたものである。また創造されたものはすべて、創造者の何らかの確定された意図の下に把握されている。というのも能働者が何かを無駄に作用することはないからである。したがって、確定された数の下にすべての創造されたものが把握されるのは必然である。それゆえ、現実態における無限の多が存在するのは、たとえ付帯的にであっても、不可能である²¹⁾。

この箇所での議論には、明示されている二つの前提がある。すなわち、諸事物の本性において存する多が創造されたものであること、および、すべての創造されたものは創造者の確定された意図の下に把握されることの二つであるが、これら二つはいずれも自明であり妥当なものである。というのも、神以外に創造されずにあるものはないのである²²⁾、神以外のすべては確定された摂理の下に置かれるからである²³⁾。しかしながら、それらに続く「したがって」からの命題が帰結するには二つの前提だけでは不足があるように思われる。というのも、「したがって」以前

21) *ST I*, q. 7, a. 4, c.: “multitudo in rerum natura existens est creata: et omne creatum sub aliqua certa intentione creantis comprehenditur: non enim in vanum agens aliquod operatur. Unde necesse est quod sub certo numero omnia creata comprehendantur. Impossibile est ergo esse multitudinem infinitam in actu, etiam per accidens.”

22) *ST I*, q. 45, a. 2, c.: “necesse est ponere a Deo omnia creata esse”.

23) *ST I*, q. 22, a. 2, c.: “necesse est dicere omnia divinae providentiae subiacere, non in universali tantum, sed etiam in singulari.”; a. 4, ad 2: “in hoc est immobilis et certus divinae providentiae ordo, quod ea quae ab ipso providentur, cuncta eveniunt eo modo quo ipse providet, sive necessario sive contingenter.”

の部分には「確定された数」について何らの言及もなく、そこからいきなり「確定された数」についての命題が帰結するのは不自然だからである。つまり、そこには何かしらの飛躍があるのであり、それを埋めるには隠れた前提として、「確定された意図の下に把握されたものは、確定された数において把握されなければならない」のようなものが必要となる。

ここでもやはり、2.1 節で言及した数と多の区別に由来する問題が生じる。というのは、ここでの論拠は、隠れた前提を用いることによって、すべての創造された多がある確定された数の下に把握されることが帰結するよう構成されているが、もし我々が『自然学註解』での記述に準拠し、数とは区別されたより一般の多を認めるなら、創造された多のすべてがより特殊なものである筈の数によって把握されるとは一般には言えなくなってしまうからである。それでは、数と多の区別を保ちつつ、確定された意図の下に多が把握される場合にはどうか。その場合、確定された意図の下に把握される多は、確定された多であるとは言えよう。しかしながら、確定された数の場合に有限性の根拠であった「一によって測られる」という規定は、超越的なものとしての多には当て嵌まらないため²⁴⁾、それが有限であるとは一般には言えないことになるのである。

2.3 さて、「神が現実態における無限を作ることはできるか」をトマスが問題にしている箇所は、上で考察した『神学大全』I, q. 7, a. 4 と態度を保留した『真理論』q. 2, a. 10 の他に二箇所ある。『任意討論 IX』q. 1, a. 1 と『任意討論 XII』q. 2, a. 2 である。いずれにおいても、現実態における無限を作ることはできないという見解が採られている。それらにおいてトマスが示す論拠は上で考察した『神学大全』I, q. 7, a. 4 における第二の論拠に類似の議論であり、内容に本質的な差異はない。ただ、用

24) 超越的な多は、それが言われるものどものそれぞれについての不分割 *indivisio* ということ以外、それらに何も付加しないからである (ST I, q. 30, a. 3, ad 2: “sed tantum multitudo transcendens, quae non addit supra ea de quibus dicitur, nisi indivisionem circa singula.”; ST I, q. 30, a. 3, c.: “cum dicuntur res *multae*, multitudo sic accepta significat res illas cum indivisione circa unamquamque earum.”; QDPD, q. 9, a. 7, c.; *InSent* I, d. 24, q. 1, a. 3, c.)。すなわち、数には測定の理拠が含まれるが多には含まれない。これについて 2.1 節の『自然学註解』からの引用を参照のこと。

いられている前提には、一応の違いがあるため、そうした前提については考察を加えておきたい。

ここで考察すべきは、『任意討論 IX』と『任意討論 XII』の双方で前提とされている「無限は形相なしの質料のようなものとして受け取られる²⁵⁾」という命題である。

まず注意したいのは、この命題が量に適合するような意味での無限について言われていることである。このことは『任意討論 IX』の方では前提を含む文脈全体が量についてのものであるため明らかである。一方、『任意討論 XII』ではその前提の根拠として「無限は質料の側で自らを保持するからである²⁶⁾」と言われているが、このように規定される無限が量に適合するものであることは『神学大全』I, q. 25, a. 2, ad 1で言われている通りである²⁷⁾。つまり、『任意討論 IX』と『任意討論 XII』とで問題にされる無限は、量に適合する無限であり、質料の側で自らを保持する無限である。

量の限界はいわば量の形相なのであるから²⁸⁾、量に適合する無限は、限界を欠くかぎり「形相なしの質料のようなもの」であるのは当然である。しかし、超越的な多には、その限界が形相であるというような規定は一般に当て嵌まらない²⁹⁾。したがって、このような意味での多に関する無限が考察されるなら、それが「形相なしの質料のようなものとして受け取られる」ということも無条件には言えないだろう。

さて、トマスが『自然学註解』で数と多の区別に言及したのは、超越的な多について無限を認めることの可能性を考慮してのことであるから(次節参照)、本節で考察された各論拠の前提をトマスが同様に疑っていた可能性はなくてはならないだろう。

25) *Quodl* XII, q. 2, a. 2, c.: “Infinitum autem accipitur sicut materia sine forma”; *Quodl* IX, q. 1, a. 1, c.: “infinitum est sicut materia nondum specificata”.

26) *Quodl* XII, q. 2, a. 2, c.: “nam infinitum se tenet ex parte materiae.”

27) *ST* I, q. 25, a. 2, ad 1: “Philosophus loquitur de infinito quod est ex parte materiae non terminatae per formam; cuiusmodi est infinitum quod congruit quantitati.”

28) *ST* I, q. 7, a. 1, ad 2: “terminus quantitatis est sicut forma ipsius”; *ST* I, q. 7, a. 3, c.: “Unde, cum forma quanti, in quantum huiusmodi, sit figura, oportebit quod habeat aliquam figuram. Et sic erit finitum: est enim figura, quae termino vel terminis comprehenditur.”

29) 脚注 24) を参照のこと。

3. 無限の数と無限の多

ここでは、前節で見た『自然学註解』における数と多の区別に基づき、現実態における無限についてのトマスの論述によって示されたことをどう評価すればよいかを検討する。そして最終的には二つのことを確認したい。しかしその前に、先の『自然学註解』からの引用箇所をより広範囲に見ておこう。

ここで次のことに注意すべきである。すなわち、これらの論拠は蓋然的なものであり、一般に流布していることに基づいて論を進めているということである。というのも以下のような理由からそれらは必然的に結論づけるものにはならないからである。(中略) 何らかの多が無限であるとする者がいれば、その者は、それが数であるとか数を有するものであるなどとは言わないであろう。なぜなら、数とは、『形而上学』10巻で言われているように、一によって測られる多であるゆえ、それは多の上に測定の理拠を付加するのであり、このことのゆえに、数は離散的な量の種として定められる一方、多はそうではなく、むしろ超越的なものどもに属するからである³⁰⁾。

この箇所の直前には、無限の多の存在を否定するアリストテレスの論拠がトマスによって整理された形で提示されている³¹⁾。この箇所では、その論拠を指して、「これらの論拠は蓋然的なものであり、一般に流布していることに基づいて論を進めている」と述べ、必然的な結論とはならないことを示そうとしているのである。またさらにその直前では、これらの論拠の前提が一般的かつ蓋然的なものであり、そのことは弁証的三

30) *InPhys* III, lec. 8: “Attendendum est autem quod istae rationes sunt probabiles, et procedentes ex iis quae communiter dicuntur. Non enim ex necessitate concludunt: quia (中略) qui diceret aliquam multitudinem esse infinitam, non diceret eam esse numerum, vel numerum habere. Addit enim numerus super multitudinem rationem mensurationis: est enim numerus multitudo mensurata per unum, ut dicitur in X *Metaphys*. Et propter hoc numerus ponitur species quantitatis discretæ, non autem multitudo; sed est de transcendentibus.” これとほとんど同内容の批判が『形而上学註解』第11巻第10講にもある。

31) 脚注19)を参照のこと。

段論法 *sylogismus dialecticus* に固有のことだと述べている³²⁾。つまりトマスは、アリストテレスの論拠を蓋然的なものに見做し、そこでの推論を弁証的なものに見做しているのである。

今、弁証と論証あるいは弁証的三段論法と論証的三段論法との違いを明らかにしておこう。すなわち、弁証や弁証的三段論法が、蓋然的な前提に依拠し、意見 *opinio* をなすものであるのに対し³³⁾、論証や論証的三段論法は、必然的な前提に依拠し、学知 *scientia* をなすものである³⁴⁾。この違いを踏まえるなら、トマスはアリストテレスの論拠を弁証的なものに見做す一方、それらを論証とは見做していないのである。そして、アリストテレスによる論拠の蓋然性を示すために、トマスは、数ではない超越的なものとして何らかの無限の多があると主張し得る可能性に言及しているのである。

さて、前節で考察した各論拠に対しても同様のことが言えると思われる。つまり、我々は前節で、各論拠に含まれる前提が必ずしも妥当であるとは言えないことを示したのであるから、それらの論拠についても、弁証的三段論法に基づく蓋然的なものであり、論証とは見做せないのだと言えるのではないだろうか。少なくともそのように考えれば、我々は『世界の永遠性について』でトマスが「論証が未だにない」と述べたことについて整合的な道筋を拓くことができるのである。

ただし、トマスが各所で論拠を展開して得られたことがらが単なる意見 *opinio* に留まるのかと言え、そうではない。見方を変えれば別の意義を引き出すことができるのである。つまり、トマスによる論拠は、弁証としての意義を有するのは当然であるが、論証の観点から別の意義

32) *InPhys* III, lec. 8: “modo logico procedunt, scilicet ex communibus et probabiliibus, quod est proprium syllogismi dialectici.”

33) *InMet* IV, lec. 4: “Dialecticus autem circa omnia praedicta procedit ex probabiliibus; unde non facit scientiam, sed quamdam opinionem.”; *InPA* I, lec. 1: “Nam syllogismus dialecticus ex probabiliibus est”; *InPA* I, lec. 31: “syllogismus dialecticus ad hoc tendit, ut opinionem faciat”; etc.

34) *InPA* I, lec. 9: “sequitur quod demonstrativus syllogismus sit ex necessariis.”; *InPA* I, lec. 13: “Unde relinquitur quod demonstratio sit ex necessariis.”; *InMet* IV, lec. 4: “Nam certa cognitio sive scientia est effectus demonstrationis.”; *InPA* I, lec. 31: “syllogismus demonstrativus ordinatur ad scientiam veritatis; et ideo ad demonstratorem pertinet, ut procedat ex his, quae sunt secundum rei veritatem immediata.”; etc.

を見出すこともできるのである。

ここでもまた、『自然学註解』における数と超越的な多との区別あるいは量と超越的な多との区別に留意しよう。この区別によって無限の二つの意味を区別するのである。つまり、一方は数や量についての無限であり、もう一方は超越的な多についての無限である。この無限の区別は『自然学註解』における数と多の区別から導き出されるものであって、トマスのテキストにおいて直接に、このような無限の区別を見出せるわけではない。しかし、このような区別によって、前節で考察した各箇所での論拠を一定程度積極的に評価できるのである。それは次のようなことである。前節で検討された各論拠は、超越的な多についての無限を対象として含んでいるものだと考えるなら、前提に難ありとなってしまう。これは前節で確認した通りである。しかし、それらの論拠の対象領域を限定的に捉えて、それらは数や量についての無限を扱い、超越的な多についての無限を含まないのだと考えれば、前提が蓋然的なものではなくなり、それらの論拠を論証として見做せることになるのである。

今、『任意討論 IX』と『任意討論 XII』の論拠については、それらが量に適合する無限について成立することは前節の考察の中で明らかだったと思うので、『神学大全』における二つの論拠について以上のことを簡単に確認しておきたい。

それら二つの論拠において言われる「多」を、超越的な多を含まない数あるいは離散的な量に適合する意味で理解すればよいのであるが、そのためには、「多」を「数を有するもの」あるいは「離散的な量を有するもの」で置き換えてしまえばよい。そうすると最初の論拠で問題となった「多の種は数の種に即してある」という前提は、「数を有するものは数の種に即してある」あるいは「離散的な量を有するものは数の種に即してある」という自明なものに置き換わり、その蓋然性が消去され必然的なものとなる。また二つ目の論拠で問題となった「確定された意図の下に把握されたものは、確定された数において把握されなければならない」という隠れた前提については、今の場合、確定された意図の下で数や量を有するものが把握されるという限定的な条件での妥当性が確保されればよい。したがって、その場合の前提は「確定された意図の下に把握された数を有するものは、確定された数において把握されなければ

ならない」という自明なものとなり、この場合も蓋然的なものではなくなるのである。

以上から、超越的な多についての無限を除外し、数や量についての無限だけを考えれば、『神学大全』、『任意討論 IX』や『任意討論 XII』における論拠を論証と見做なせることが判る。すなわち、数や量についての無限を神が現実のものとして作ることはできないのであり、それは論証可能である。

なお、各論拠を論証と見做す際の要点は、数や量の理拠に有限性をもたらす要素が組み込まれていることである。すなわち、数の場合で言えば、「一によって測られる」という規定であり、量の場合で言えば、「限界によって捉えられる形状 *figura* を有する」という規定である³⁵⁾。これらの規定によって現実態における数や量は限定がないことと両立できないのである。したがって、「数や量についての無限が現実態にある」は矛盾を含むことになり、神の全能によってもそれを実現することはできない。

しかし、ここで問題となるのは、神が現実態における超越的な多についての無限を作ることができるかどうかである。超越的な多には、「そこに属する個々のものの不分割」以外の規定が含まれないのであり³⁶⁾、上と同様な議論ができないからである。そこで最後に、この問題についての一つの見解を提案することで結びに代えたい。これは第1節末尾で挙げた第二の課題についての一つの見解でもある。

35) 脚注28)を参照のこと。

36) 脚注24)を参照のこと。なお、現代数学において議論されている種々の数的無限(カントール以来の超越数や超準解析における無限小や無限大)は、少なくともある種の問題として既に一定の市民権を得たと言えるが、それは、ある観点からすれば、「一によって測られる」から「集合や系列のある種の対応によって測られる」へと「測定」概念が拡張され、それに基づく順序関係や四則演算などの定義が導入されたことによると見ることができる(超越数については、カントール『超限集合論』(功力・村田訳、共立、1979)解説(p. 149)および永井博『数理の存在論的基礎』(創文社、1961)第三章、第四章を、また、超準解析における無限小や無限大については、Goldblatt, R., *Lectures on the Hyperreals*, Springer, 1998, part I (特に, chap. 3) および斎藤正彦『超積と超準解析』(東京書籍, 1987)第一章を参照されたい)。したがって、現代的な種々の無限を認めるとすれば、それらは明らかに「一によって測られる多」ではない一方、構成要素のそれぞれは不分割であるため、強いてトマスの分類に当て嵌めるならば、「超越的な多」に属することになるう。

4. 結びに代えて

残された問題は、超越的な多についての無限が現実態においてあることはできるか、あるいは、神がそれを実現できるかである。当然、トマスの著作にこの問題を直接扱う箇所はないのであるから、もしこの問題に答えようとするなら、何らかの解釈を導入せざるを得ない。

しかし、どのような根拠の下で議論するかを別にすれば、この問題に対する可能な結論の選択肢は、今の場合限られている。すなわち、超越的な多についての無限が現実態においてあることを、(1)神が実現することはできないとするか、(2)少なくとも神の絶対的能力に即してであれば実現できるとするか、(3)何の条件もなしに実現できるとするか³⁷⁾、のいずれかである。

ここで、(3)の選択肢を採ることは、不可能とは言えないものの、かなり困難であることは直ちに判る。というのは、超越的な多についての無限を端的に実現できるとしてしまうと、トマスが様々な著作の様々な箇所で、無限の多の不可能性に依拠して議論していることの基盤が危うくなってしまふからである³⁸⁾。残る(1)と(2)の選択については、以下に述べるような洞察にしたがい、本論文では(2)を有力視したい。

まず再度確認したいのは、数や量の場合と異なり、超越的な多の理拠には有限性を導くような要素が見当たらないということである³⁹⁾。したがって、現実態における超越的な多の無限が矛盾することの根拠を特定することは難しいと思われる。

また、神の知に関するトマスの議論からも(2)を支持する理由を引き出すことができる。まず、『神学大全』I, q. 14におけるいくつかのことを確認しておこう。

37) 「何の条件もなしに」と述べたのは、神の絶対的能力 *potentia absoluta* のみならず、秩序付けられた能力に即しても可能だとするような含意を込めたことである。トマスの絶対的能力と秩序付けられた能力については、例えば、小笠原史樹「神の絶対的能力」、『哲学』57号、pp. 152-164, 2006などを参照のこと。

38) 文脈に応じた特別な根拠から無限の不可能性を述べている箇所はこのかぎりではない。例えば『神学大全』q. 2, a. 3などでは、原因の無限廻りの不可能性について、無限それ自体の考察とは独立に一定の根拠づけがなされているのである。

39) 脚注24)を参照のこと。

神は現視の知によっても無限を知ると言わなければならない。なぜなら、神は、終わりなく存続する理性的被造物において無限に多数化される心の思念や情念をも知るからである⁴⁰⁾。

ここから確認できるのは、神が無限に多数化されたものを認識することであるが、その認識がどのようなものであるかについてさらに次の言明を見ておきたい。

神は、部分の後に部分を数えるというような仕方でも無限や無限のものを認識するのではない。なぜなら、上述のように、神は、継次的にはなく、すべてを同時にという仕方でも認識するからである。それゆえ、神が無限のものを認識するのを妨げるものは何もない⁴¹⁾。偶然的なものが現実態において生じるのは継次的な仕方によるのではあるが、神は、我々のようにそうした偶然的なものをそれらの存在においてあるかぎりでも継次的な仕方でも認識するのではなく、むしろそれらを同時に認識する。(中略) 時間において存在するすべてのものは神にとって永遠から現前するものなのであり、(中略) それというも、神の直観は、すべてのものが神の現前性においてあるかぎりでも、永遠からそれらすべてに及ぶからである⁴²⁾。

一つ目の箇所から、無限に多数化されたものの全体が同時に神によって認識されることがわかる。そしてこのことを二つ目の箇所の「時間において存在するすべてのものは神にとって永遠から現前する」ということと合わせて考えるならば、神には無限に多数化されたものの全体が同時

40) *ST I*, q. 14, a. 12, c.: “necesse est dicere quod Deus etiam scientia visionis sciat infinita. Quia Deus scit etiam cogitationes et affectiones cordium, quae in infinitum multiplicabuntur, creaturis rationalibus permanentibus absque fine.”

41) *ST I*, q. 14, a. 12, ad 1: “Deus autem non sic cognoscit infinitum vel infinita, quasi enumerando partem post partem; cum cognoscat omnia simul, non successive, ut supra dictum est. Unde nihil prohibet ipsum cognoscere infinita.”

42) *ST I*, q. 14, a. 13, c.: “Et licet contingentia fiant in actu successive, non tamen Deus successive cognoscit contingentia, prout sunt in suo esse, sicut nos, sed simul. (中略) omnia quae sunt in tempore, sunt Deo ab aeterno praesentia, (中略) quia eius intuitus fertur ab aeterno super omnia, prout sunt in sua praesentialitate.”; *SCG I*, cap. 66.

に現前するということが判る。

今、「現前するもの *praesentia*」が現実態においてあることを含意するか否かが解釈の分かれ目である。もちろん無限に多数化されるといっても、それらを各時点での被造物の存在に即して見れば、それらは継次的に生起する可能態における無限であるとは言えよう。しかし、現視の知によって全体が同時に捉えられるという場合、それらは既に被造世界において現実態を得ているものの全体が同時に捉えられる筈である。そしてこのことから、同時に捉えられるところの全体も現実態にあると言える和我々は考える⁴³⁾。しかし、これは神の知における話であるから、今言えたのは、神の知において現実態における無限の多の全体が同時に認識されるということである。

しかるに、たとえ神であっても矛盾を含むことがらを認識することはできない⁴⁴⁾。したがって、無限に多数化されたものの全体が同時に現前しても、そこに矛盾は含まれない。矛盾を含まないことのすべてを実現できる能力こそが神の全能なのだから (1.1 節参照)、神は全体が同時にある無限を作れるのでなければならない。

本論文では、以上のような解釈の可能性に鑑みて(2)を支持しておきたい。

43) これについては、次を参照のこと。ST I, q. 5, a. 2, c.: “secundum hoc unumquodque cognoscibile est, in quantum est actu”; q. 84, a. 2, c.; q. 87, a. 2, c.; q. 87, a. 3, c.; SCG II, cap. 98; SCG III, cap. 46; *InDA* II, lec. 6.

44) *QDPD*, q. 1, a. 3, ad s.c. 1: “Hoc autem quod est affirmationem et negationem esse simul veram, non potest mente concipi, ut probatur IV *Metaph.*, et per consequens nec aliquid eorum in quibus hoc includitur.”; *Quodl* IX, q. 1, ad s. c.: “quod autem sibi ipsi est repugnans, mente concipi non potest, quia nullus potest intelligere contradictoria esse simul vera, ut probatur in IV *Metaph.*”; *InPA* I, lec. 5.